

## 2016年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 社会学部・教授・荻野 昌弘

研究課題：集合的記憶に関する社会学的研究

研究期間：2016年4月1日～2017年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

集合的記憶論は、社会学の一領域としてここ十年来注目されている領域である。本研究期間においては、これまで積み重ねてきた集合的記憶に関する研究を基に、新たな研究を展開することに費やした。

まず、純理論的側面では、集合的記憶概念を生み出したフランスの社会学者モーリス・アルヴァックスの『記憶の社会的フレーム』の講読を通じて、安易に使われやすい集合的記憶概念がどのようなものであるのかについて考察した。その成果の一部は、まだ翻訳されていないこの著書の翻訳出版の監修者（2017年10月刊行予定）として発表予定である（業績1）。

次に、実証研究としては、大きく分けて二つの研究を行った。まず、フランスのテロ事件について、かつての植民地アルジェリアの集合的記憶との関連性から、7月にフランスで調査を行い、その成果の一部は、2016年10月刊行の好井裕明・関礼子編『戦争社会学』（明石書店）の第一章「戦争と社会学理論」（業績2）に活かした。また、2016年日仏社会学会で、「何がテロを生み出したのか—フランス社会の深層」と題して基調講演を行った（業績3）。これは、『日仏社会学年報』に論文として掲載予定である（業績4）。

戦争にしても、テロリズムにしても、突然起こるわけではなく、歴史的にさまざまな明確にかたちにはならないような「記憶」の積み重ねによって、他者への反感が生まれるところが、きっかけとなっている。2014年から2016年にかけて、フランスにおいて起こったテロの場合でも、フランスがかつて植民地化した北アフリカ系移民の第2、第3世代の生活空間と、一般のフランス人との間に、大きな亀裂が生じていることが大きな原因であるが、それは両者のあいだの「集合的記憶」に溝があるからである。

ただ一方で、ふたつの集合的記憶には、共通の特徴がある。それは、過去に比べ、現在を否定的に捉えているという点である。過去との比較において生じる剥奪感がその特徴なのである。いわゆる「フランス系」フランス人においては、エリック・ゼムールの著書『フランスの自殺』（Eric Zémour, *Le Suicide Français*, 2015）にそれは典型的に示されている。この著書で、ゼムールは、フランス社会のエスノグラフィーを通じた、ライシテ（Laïcité）と同化主義（assimilation）に基づく共和国イデオロギーの復古を説いている。イスラム原理主義に飛びついたテロリストも、復古思想を（どこまで本当に信じているかどうかは別にして）信奉して、過激な行為に走った。

フランスの現代の状況は、「過去との比較において生じる剥奪感」を示している。これは、ある意味で、アルヴァックスが考えたような集合的記憶のあり方とは異なる。一方で、「過去」を「伝統」として捉え、伝統を記憶に留めていこうとするあり方を無形文化遺産の研究を通じて明らかにしようとした。中国芸術研究院の招聘教授（foreign expert）として、中国に一ヶ月滞在したが、その際に、中国の磁器の伝統的な生産拠点である景德鎮を中国人研究者と調査し

た。その成果は、「芸術と都市—景德鎮を事例として」と題して、中国芸術人類学会において報告した（業績5）。そこでは、都市を支えるのは何か／芸術・文化が都市を支える中心的要素になりうるかという問いから、芸術・文化が都市の中核となっているように見える景德鎮の特徴について論じた。具体的には、1「芸術家」「職人」「若者」「外国人」など多様な人々が制作活動を行っている2それぞれの制作者カテゴリーでは、制作方法も、それぞれ異なるし、作品の売り方も異なる3こうした様々なタイプが存在することで、陶芸芸術が多様であることを示している、の三点を指摘した。

その後、景德鎮と比較するために、日本の磁器産業の発祥である有田・伊万里を調査し、加えて、有田焼の影響から磁器生産を始めた瀬戸、常滑を調査した。特に、伊万里において磁器生産を家業とする作家にインタビューできたことは貴重なデータとなっている。このデータを通じて得られた知見は、伝統工芸の継承は、「環境」と大きく関係しており、環境に身をおいていることで「自然」と継承されるので、それを言語化することは難しい。ただ、伝統工芸継承者の「身体」および「身体と環境」について観察すれば、ある程度の示唆は得られるであろうということである。現在、文化遺産に関する著作を中国で出版するため、その執筆を進めているが、今回の調査で得られた知見をしれに活かしていきたいと考えている。また、2017年3月に南オーストラリア大学で開催された国際会議でDisaster and Timeと題して報告したが、そこで展開している時間概念に関する理論を伝統工芸継承理解に援用していきたい。

研究成果概要は、データは [gakunai@kwansei.ac.jp](mailto:gakunai@kwansei.ac.jp) まで提出してください。